

美しい自然を次世代へ

進む循環型のまちづくり



▲イベントなどで、ごみの分別を呼びかける(ジュニアトライアスロン)

私

たちが豊かな生活を送るためには、さまざまな資源を利用していくかざるを得ません。しかし、大量消費による資源の枯渇は、それに頼ってきた私たちの生活を成り立たないものにして、今を過ごしています。そして、今の私たちの豊かな生活のために次世代を犠牲にしてはなりません。現世代と次世代の「豊かさ」を両立するためには循環型社会への転換が必要です。つまり、大量



▲廃品回収の様子(八郷小学校PTA)



▲ごみ集積所の整備を支援

生産・大量消費・大量廃棄をベースにしたこれまでの社会から、環境保全型産業活動と環境に配慮した生活スタイルからなる循環型の社会への転換です。その実現のために、私たち一人ひとりが省資源・省エネルギー・リサイクルを心がけることが必要です。

約2,584トンを収集

伯耆町のごみの状況

平成19年度に伯耆町で収集した(各家庭から排出された)ごみの量は、約2,584トン。町民一人あたり年間約210kgのごみを出していることになりました。これは、平成18年度の収集量と比べると、人口減と環境意識の高まりにより約6.2%減少しています。



▲町の指定管理を受けて(南)アリオンが管理・運営する伯耆町清掃センター(福島)。多いときには、1日に10トンの燃えるごみが運ばれてきます。平成19年度、この施設で溝口地域などから収集された燃えるごみ806トンが焼却されました。

2,584トンは
25mプールおよそ

7杯分

約7割が再び資源に

町内にあるリサイクルプラザは、近隣の市町村から搬入された資源ごみや不燃ごみ、古紙類などをリサイクルし、資源として再生する施設です。町内の各家庭で分別され集められた資源ごみ、不燃ごみ、不燃粗大ごみ、ペットボトルと、新聞や雑誌、ダンボール、牛乳パックなどの古紙類を合わせた778トンのうち、約7割(古紙類は、ほぼ全量)が再資源化されています。

残りカスを建設資材に

リサイクルプラザで再資源化された後に残ったものや焼却施設で処理された可燃ごみの燃えかす(灰)は、エコスラグセンターに運ばれます。この施設は、簡単に言えば、埋め立てるしかないごみのかすを溶かして溶融スラグという建設資材にリサイクルする施設です。

このように、リサイクルを重ねることで、有限である最終処分場(埋め立て地)の延命が図られています。



▲西部広域行政管理組合リサイクルプラザ